

# 安・衛通信

発行:小澤労働安全コンサルタント事務所  
文責:所長 小澤 清



## 「分る」と「出来る」は違う

私は、事業場から安全の仕事の依頼を受けたとき、できるだけ朝礼から参加するようにしています。その朝礼で「今日の危険箇所は〇〇です。分かりましたか?」「は〜い」などというやりとりをしている場面をよく見かけます。もちろん、どこが危険なのか、それは何故危険なのか、どうすればよいのか、管理者は現場の作業者に問いかけたりすることは必要です。それを受けて、作業側は危険箇所を把握し回避行動を取りながら作業を進めて行くことが可能となります。でも、「分かっていたけど出来なかった」という話をよく耳にします。今回は、「分ると出来る」は違います。このことを考えてみましょう

## そもそも「出来ないことを注意してね」と言っている



二人でペアになり、左図のように一人が手に持っている15センチメートルくらいの鉛筆を落とし、片方の者がそれを掴んでみましょう。掴めましたか?

掴めるか掴めないか、ぎりぎりのところではないかと思います。人間は、「あっ」と思ってから、それを回避する動作を始めるまでに時間がかかります。反応時間といいますが、この場合は0.4秒です。一方、鉛筆が15Cm落下するのは0.5秒です。その差わずか0.1秒。理屈からいえば掴めて当然でしょうが、0.1秒なんて、ちょっと注意を逸すれば「あっ」という間です。注意喚起も結構ですが、その危険は、本当に「注意」で回避できることなのか。朝礼では現実をよく考えて注意喚起しましょう。

## では、どうすればよいのか?が、分っていない!

岩山登山で「滑らないように注意してください」と、ベテランが何度も注意しているのに、初心者が滑落してしまうということがあります。初心者は、どうすれば滑らずに済むのかが分っていないので、浮石に足をかけてしまうのです。

同じようなことが現場作業でないでしょうか? 高所作業をするときには、「墜落に注意」は当然ですが、新人は、具体的にどうすればよいのか、分っていないということがあります。安全帯を身体のこの部分に着け、手はこの場所をつかみ、足はここにこう力を入れて・・・と、具体的なところまで説明をしてやらなければなりません。それも、頭でわかっているだけではだめで、身体が覚えていなくてははいけません。訓練の意味はそこにあります。そこまで出来て初めて注意喚起は生きてきます。「頭で分かるだけでなく」「知識を知恵に変えて行く」⇒知っていることと出来ることは違います。

